

# えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から

(135)

掛け軸に描かれた頬骨が張った意志の強そうな顔。どこかで見たような気がする人も多いかもしれない。

如電は江戸時代後期の蘭学者大槻玄沢(げんたく)を祖父にもち、蘭学関係の資料の収集家としても知られる。女性画家の森鑑子が模写に当たっているが、長英の厳しい表情など、原本に忠実な模写がされていることがうかがえる。

片を持ち出した人物について、蘭学の研究会である尚は定かではないが、長英が五觀と推測している。真偽大きく異なる点がある。それは、肖像の上部に贊が加えられていることである。この贊は、如電の依頼により長英の

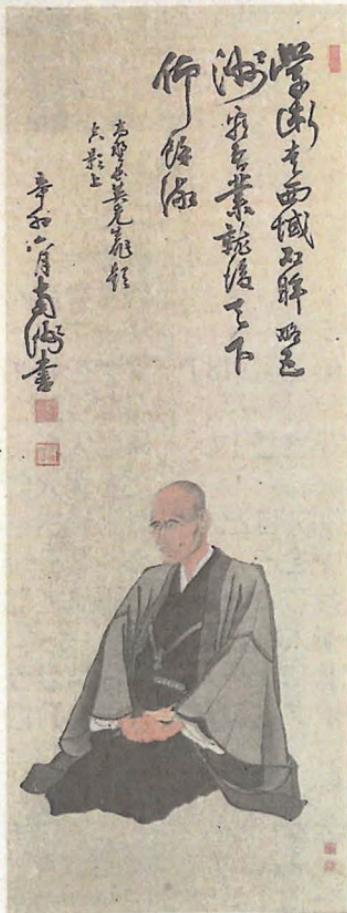
本資料で1点だけ原本と大異なる点がある。それ長英は、1844(弘化元)年に牢舎(ろうしゃ)の火は、肖像の上部に贊が加えられていたことである。この贊は、如電の依頼により長英の

亡くなつてから40年余りし漢詩を、かつての宇和島藩が経過しない時期における8代藩主であった伊達宗城が書いたものである。

「夢物語」で幕府の対外政策を批判して投獄された長英は、1844(弘化元)年に牢舎(ろうしゃ)の火事で逃亡し、48(嘉永元)年に宗城にかくまわれる形で宇和島を訪れ、砲台の設計や洋書の翻訳に従事している。また、蘭学塾の五岳堂を開き、若い藩士に蘭学を教えていた。単なる模写ではなく、長英と不思議な縁で結ばれた宗城の贊が加わることで、新たな価値が吹き込まれた資料といえる。

(学芸課長・井上淳) ▲随時掲載します

## 高野長英画像



高野長英画像。明治時代、県歴史文化博物館蔵。特別展「学校の宝物」で4月3日まで展示

掛け軸を収めた木箱には、1892(明治25)年の如電による箱書きがあり、国的重要文化財に指定されているが、本資料は大槻如電(じよでん)が明治時代に原本を借り出し、模写させたものである。

岩手県奥州市)が所蔵しており、国的重要文化財に指定されているが、本資料は大槻如電(じよでん)が明治時代に原本を借り出し、模写させたものである。